

資料5 義務教育学校建設候補地の比較検討

清和義務教育学校の建設候補地は、「目指す学校像」（資料4）の実現のために最適な場所という観点から選定しますが、想定される建築面積及びグラウンド等の必要な広さの確保、災害リスクの低さ、エリア内の移動距離（時間）の平準化等の条件をある程度満たす必要があります。

それらの条件に照らし、現在の清和中学校、清和小学校、清和グラウンド、阿蘇森林組合清和加工所（旧菅原織物工場）の4か所を候補地としてリストアップしています（次頁）。以下に、比較検討の参考となる各数値を示します。

【参考1】清和地区の児童・生徒数規模（開校予定の令和9年度予測値）／山都町学校規模適正化報告書資料より

令和9年度は150人前後の生徒数を見込んでいますが、出生数の減少等の事情から微減傾向が続くものと予測されています。

清和(清和小、清和中)

学年	前期						後期			特別支援学級	合計
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年		
児童生徒数	13	10	16	12	18	14	11	20	17	-	131
学級数	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4	
前期・後期別人数計	83						48			-	13
学級数計	6						3			4	

【参考3】清和義務教育学校の施設規模／文科省学校設置要領より

一般的な学校施設は、普通教室や特別教室、図書室や保健室、職員室などの諸室と屋外運動場、屋内運動場（体育館）、プールなどで構成され、その点は清和義務教育学校でも変わりません。

一方で、それらに必要な面積については、学校の生徒数およびクラス数に応じた面積算定の方法が文科省によって示されています（公立学校施設国庫負担金に関する関係法令等細目）。これに準拠し、令和9年度のクラス数（上記【参考1】）をベースに算定すると、清和義務教育学校では校舎面積が5800㎡程度、屋内体育館が2032㎡程度の規模が想定されます（資格面積という）。

この面積は、文科省が小学校・中学校の別に示した算定方法を合算したもので、建設可能な上限値と考えます。実際には、スペースの兼用などで減ったり、清和独自の考え方による施設の追加などにより増加したりしますので、比較検討用の数値とします。

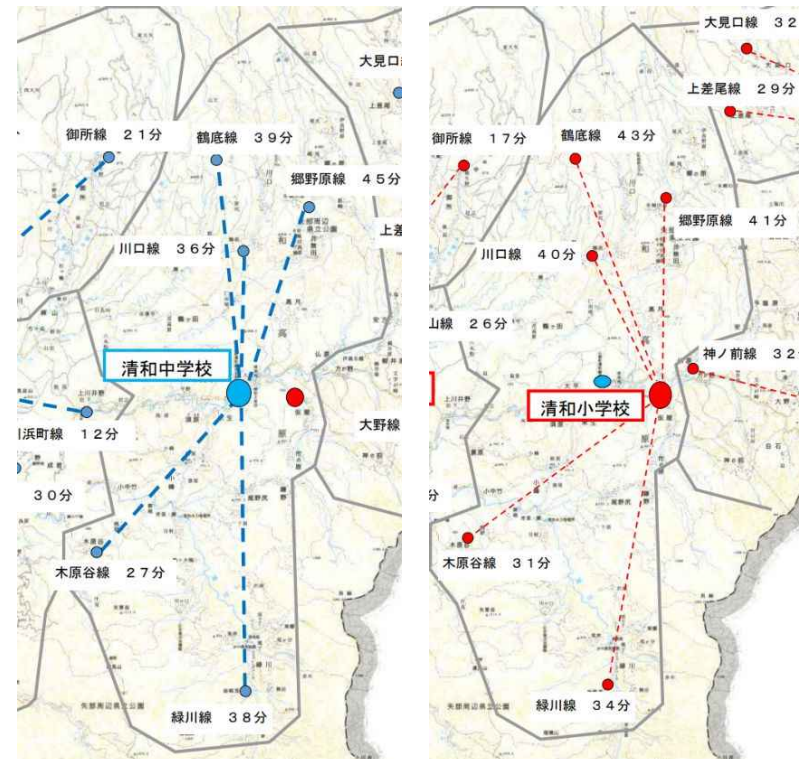
	設定条件	校舎面積	屋内運面積	武道場	計（単位：㎡）
前期課程（小学校）	普通6学級 特別支援2学級	3,308.72	894		4,202.72
後期課程（中学校）	普通3学級 特別支援1学級	2,515.03	1,138		3,653.03
合計（単位：㎡）		5,823.75	2,032.0		7,855.75

※実際の校舎等の面積は、次年度以降の基本設計段階で検討します

【参考2】清和地区内のスクールバスによる移動距離

／山都町学校規模適正化報告書資料より

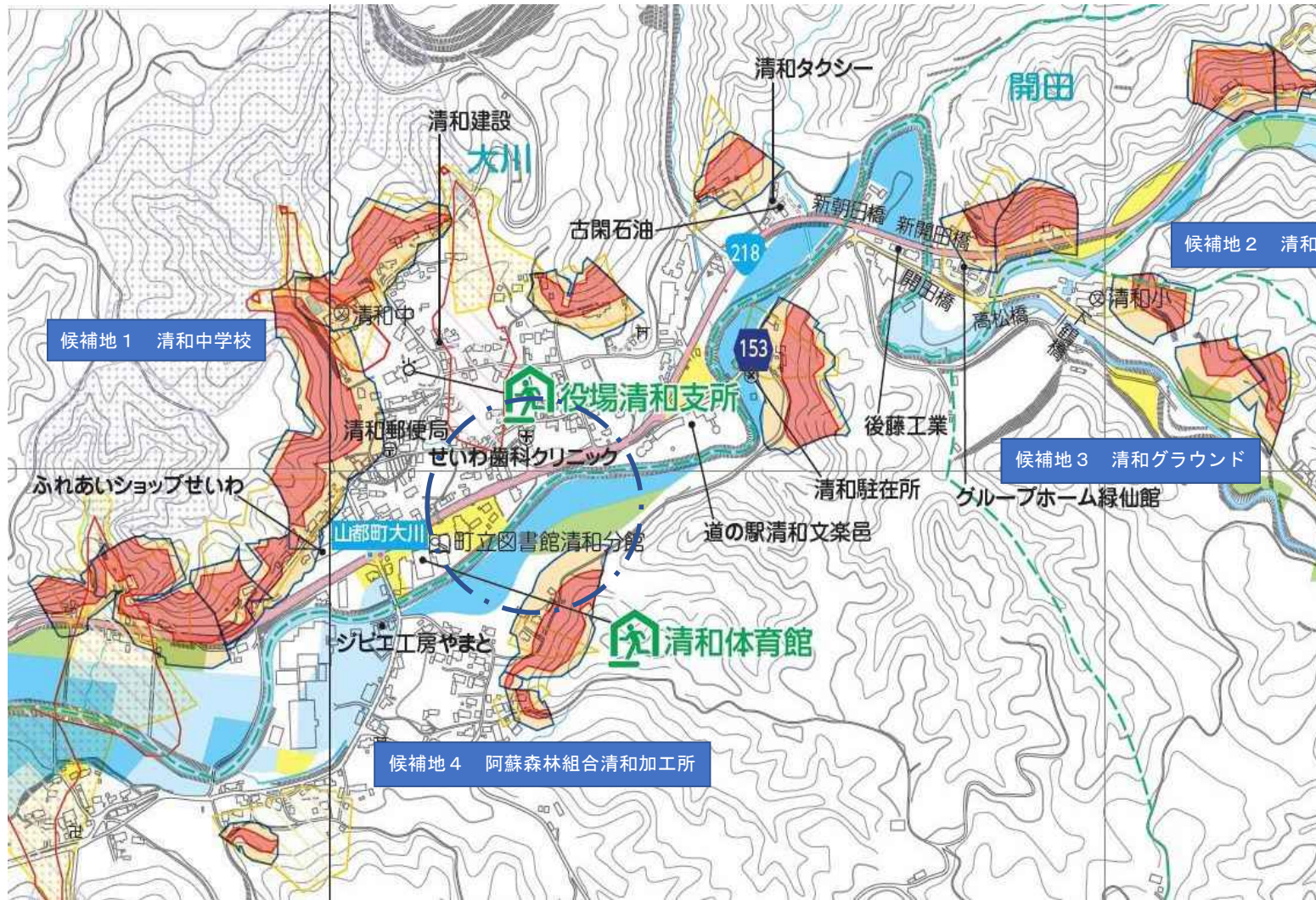
スクールバスを活用し、各集落より片道1時間以内を基本と考えると、現状の路線網でも実現しています。なお、清和グラウンドは清和小学校隣接地、清和森林組合用地は清和中学校に近く、4候補地ともほぼ同等の条件と考えられます。



【清和義務教育学校建設の候補地】

候補地		1. 敷地面積	2. 災害リスク	3. 隣地等の立地特性	4. コスト比較（概算）	総合所見
候補地 1 清和中学校敷地		約18,700㎡ 敷地の北半分は建築を避けた方がよい（右欄参照）が、広さは確保できる。 土地の一部に境界未確定部分があるため調整が必要。	・山に近い部分に特別警戒区域・土石流、急斜面地の崩壊などのリスクがあり、建築に制限をうける部分を含む（ハザードマップより） →現在の運動場エリアに建築することで回避可能と考えられる	・清和地区の中心エリア ・南側に清和支所が接している →現役場庁舎2階と連続させると、 地域開放等 のスペースとして活用できる可能性がある	・現グラウンドに建てれば仮設校舎建設が不要となる ・ 庁舎2階を活用 できれば建設面積の一部を減じることができる →建築費は最も少ないと考えられる ※職員駐車場が慢性的に不足しているため、別途用地確保の必要が生じる恐れがある	・背後の山に起因する災害リスクがあるが、庁舎2階の活用などのアイディア次第では、清和独自の地域開放の学校が実現できる
候補地 2 清和小学校敷地		約9,300㎡ 資格面積（前頁）を設定すると手狭になる	・運動場の一部が特別警戒区域・急斜面地の崩壊等に指定される。 ・河川に囲まれた土地であり、今後の予想を超える豪雨災害時の評価が難しい。 →必要な耐力を持たせた建築物により対応可能と考えられる	・近隣に住戸は少ない →騒音等の近隣住戸への影響を抑えられる。一方で、 地域の中心との距離の影響を見込む必要がある。	・既存校舎解体後に鉄筋コンクリート造による高層化が想定され、連動して杭工事なども発生する。 ・仮設校舎が必要 →建築費は最も高いと考えられるが、例えば、 中学校空き教室を仮移転先とするなどの工夫で抑えられる出費もある	・単独では敷地に余裕が生まれず、屋外運動場が確保できないことから、隣接のグラウンドとの同時利用の可能性が高い（単独では難しいと考えられる）
候補地 3 現 清和グラウンド		約28,000㎡ 最も広い平坦地を確保できる	・ハザードマップ記載の災害リスクなし。 ・清和小学校と同様に、豪雨時の想定が難しいが、敷地全体の浸水は考えにくい。 ・斜面を登るアクセス路に不安が残る →別途、 アクセス路の確保することで不安は解消される	・近隣に住戸は少ない ・ 高台 のため周囲から内部の様子が 見えにくい ・現在の利用者であるスポーツ関係者との調整が必要 →騒音等の近隣住戸への影響を抑えられる。一方で、 地域の中心との距離の影響を見込む必要がある。	・既存構造物が少なく解体費、グラウンド整備費が少ない ・仮設校舎は不要 ・アクセス路拡充のための土工事が望ましい →土工事次第でコスト増減幅が大きい が、小学校・中学校共に現在の校舎を使用できるため生徒の負担は少ない	・小学校敷地との高低差は無視できないが、グラウンド側に主要施設を配置し、旧小学校敷地に駐車場等の補助機能を分担させるなどの活用が考えられる。 ・芝のグラウンドを運動場として活用できる ・河川が溢水するなどの非常時の対応を入念に検討する
候補地 4 現 阿蘇森林組合清和加工所		約20,000㎡程度 さらに周辺地を買取できるとプランの自由度が高まる。現状、町有地として賃貸中のため、契約解消のための調整を要する。	・敷地西半分に浸水の恐れがあり（ハザードマップより）過去に、浸水被害あり。低地のため、今後も浸水の恐れがある。 →建物の浸水被害を防止するため、 敷地の嵩上げ を行う必要がある。併せて、 開発許可（土地形状の変更） が必要になる。一方で、平地であるため斜面上に起因するリスクを考えなくてよい。	・清和地区の中心エリア ・国道からの アクセス がよく、 見通しもよい →現在の清和中学校よりも 国道に近く、自動車アクセスしやすい。新校舎が自立つのでアピールしやすい。	・土地取得のための買収費等に加えて、既存施設群の解体費等が発生する ・土地形状次第では、鉄筋コンクリート造による高層化が必要（連動して杭工事なども発生） ・仮設校舎は不要 →敷地を確定させる費用、開発行為（盛土等）関連費用等が発生し、総予算およびスケジュールへの多大な影響を及ぼすため、 事前に把握する必要がある	・敷地として使用可能な範囲を確定するために準備を要する（賃貸関係の調整、隣接地の買収等）が、まとまった広さの平坦地に建築できる。 ・浸水リスク回避のため敷地全域の嵩上げが前提となるが、国道からの視認性も高く、地域社会の中での存在感を発揮しやすい

【山都町ハザードマップからみた候補地の状況】



候補地 2 清和小学校

候補地 1 清和中学校

候補地 3 清和グラウンド

候補地 4 阿蘇森林組合清和加工所

凡例

凡例		特別警戒区域・土石流
		警戒区域・土石流
		特別警戒区域・急傾斜地の崩壊
		警戒区域・急傾斜地の崩壊
		急傾斜地崩壊危険箇所
		土石流危険区域
		土石流危険渓流
		警戒区域・地すべり
		地すべり危険箇所
	浸水想定区域	
		浸水深 2m 以上～5m 未満
		浸水深 1m 以上～2m 未満
		浸水深 50cm 以上～1m 未満
		浸水深 50cm 未満